

ドラゴンファミリー登場!!

11月26日(日)、市民会館において劇団「ドラゴン・ファミリー」の旗揚げ公演が行われました。この劇団は、昨年の国民文化祭で上演された恐竜ミュージカルの出演者らが、「勝山に本格的な劇団をつくりたい。」との思いから、市内を中心とした17名のメンバーで結成されました。まだ立ち上がったばかりということもあって、ステージは基礎となる朗読や群読が中心となりましたが、身振り手振りを交えながらの感情を込めた台詞に、訪れた約200人の観客は耳を傾け、物語の世界に浸っていました。

第4部の朗読劇『おじいちゃんの口笛』で主役のベツラを演じた安岡由理那さん(成器南小6年)は「緊張したけど、練習の成果を出せたと思う。役になりきるために、元気で大きな声を出すことに心がけました。できたらこれからも続けていきたいです。」と舞台を終えた感想を話してくれました。

また、当日はアドバイザーの横山由和さんも東京から駆けつけ、「勝山に生まれたこの劇団を大事にしてほしい。これからの積み重ねで良く育っていつか市の名物になりますよ。」と期待を寄せてくれました。



朗読劇『おじいちゃんの口笛』を熱演するメンバー

開館15周年を記念して図書館まつり

勝山市立図書館が開館して15周年となるのを記念して、同図書館では、図書館まつりを企画し、11月11、12日の両日にわたり、多彩な催しが開かれ、約1,300人の来館がありました。

「古雑誌もってって市」では、保存期限が切れた約6千冊の古い雑誌を自由に閲覧し、欲しいものは無料で持ち帰ることができ、多くのかたが足を運んでいました。

また、「地下書庫へ行ってみよう」では、図書館の地下室が初めて一般に公開されました。地下室には、古くなった図書や雑誌など、約2万冊が適度な湿度の管理の下で保管された状態で眠っています。そういった本を、この日に限り自由に手に取って選ぶことができ、利用者は気に入った本を見つけて借りていきました。

1日目は、毎年恒例の「おはなしでこいスペシャル」に加え、平泉寺の歴史を映像で紹介する「平泉寺ものがたり」も満席の盛り上がりを見せました。

さらに、夜には「ハーブと詩の夕べ」が催され、児童文学作家の藤井則行さんが詩や童話を朗読するのに合わせ、広部正雄さんのハーブがきれいな音色で奏でられ、会場の観客は、優雅な世界に引き込まれていました。

2日目は、K&Pエロさんによる手品や福井市在住の断家「はやおき亭貞九郎」さんによる落語「まんじゅうこわい」なども披露され、来場者のかたは、充実した図書館まつりに満足していました。



藤井さんの朗読する童話に聞き入る観客



いろいろなゲームで力一杯体を動かす子どもたち

12月3日(日)、勝山南部中学校体育館で「チャレンジキッズスクエア」が開催されました。これは、仲間と力や知恵を合わせて様々なゲームを体験するもので、勝山、大野、永平寺の園児から中学生までの約200人が参加しました。

参加者は段ボール箱12個を制限時間内に積み上げる「ダンボールビルド」や、4人が丸太になって寝ころびに乗った人を落とさないようにゴールに運ぶ「丸太転がり」、台の上に1列に乗ったまま順番を入れ替えていく「ラインナップ」など、仲間で協力しないとできない11種類のゲームを楽しみました。初めて体験する遊びばかりとあって、体育館は絶え間なく子どもたちの歓声が響き渡り、子どもたちはどのゲームをしようか飛び回っていました。

参加した木下真照くん、北川健人くん、榎家悠介くん、中村純基くんの村岡小学校3年生チームは、「全部初めてのゲームで、みんなで遊ぶのはおもしろい。」と話してくれました。また、テレビゲームと比べると、「今回のほうが楽しい。」と声をそろえて元気に応えていました。

仲間で力を合わせて

青春ing



中村 早也香さん(15) 片瀬

税についての作文で、大野と勝山市の中学生から寄せられた429点の中から、見事に大野税務署長賞を受賞した中村早也香さんは、南部中学校3年生。作文を書くこと、中村さんの知っている税を思い浮かべても、出てきたのは、消費税のみ。「税が何に使われているのか、どのくらい集まるのかも分からない。税について調べていくうちにもっと納税者に情報を提供し、税について広く、多くのかたに知ってもらうための広報が必要だ。」と中村さんは考え、強く感じたことを作文にし、評価されました。

中村さんは、読書をした後に、自分の思いや考えを文章にまとめるのが好きだとのこと。日頃の何気な

い努力が礎となり今回の受賞に結びついたことに、喜びが自然と表情に現われます。

部活動は、吹奏楽部で、クラリネットを担当。「クラリネットは奏者が多いため、人間関係やチームワークの大切さを学びました。」と、はきはきと笑顔で応えてくれる中村さんでした。

出会い  
ふれあい  
すてきに人生



着物と歩み続ける人生

塩見 聡さん(54) 元町

普段着に着物を身に着ける塩見聡さんは、去る11月11、12日の両日にわたり、百年以上にわたり保存されてきた打ち掛けや紋付・振袖などを展示した「明治・大正・昭和の花嫁衣裳展」を開催しました。

塩見さんからは、「現在、着物は工芸作品。しかし、着物の柄には親の願いや思い出が込められています。そこを引き出して、工芸のハードと心の伝承のソフトのバランスを取り戻し、日常生活での着物との接点を見直してほしい。」と展示会にかけた思いを聞かせてもらいました。

また、塩見さんは、「自分の和服姿を見かけ、親しみをこめて声をかける人もあれば、雨に濡れそうな自分に傘を差しかける人もいて、着物を通じた人との交流がすばらしい。」と、着物

を装う楽しさを語ります。

平成元年の頃から、当時の白峰村で、作家の高橋治さんや大学の教授など文化術に秀でたかたが集う「僻村塾」が開かれ、塩見さんも参加しています。「そこでの話し合いは、その場では理解できないものの、後で、なるほどと思いつくことがあります。例えば、地域にすでにあるものを大切に、活かしながら育てていくというエココミュニケーションと同様の発想が、同塾ではずいぶん前から話題に上がっていました。」と、塩見さんは、その塾のすごさに感心します。

塩見さんの好きな言葉は『邂逅(かいこう)、開眼す』で、「人に巡り合って新たな境地を開く」の意。趣味は読書。現在、名字と家紋についての関係を研究中とのことでした。